

山西の村に遊ぶ（陸游）

笑う 莫かれ 農家 臘酒 渾るを

豊年 客を 留むるに 鷄豚 足る

山重 水複 路 無きかと 疑う

柳暗 花明 又一村

簫鼓 追隨して 春社 近く

衣冠 簡朴 古風 存す

今より 若し 閑に 月に 乗ずるを 許さば

杖を 拄き 時と 無く 夜 門を 叩かん

莫笑農家臘酒渾 豊年留客足雞豚
山重水複疑無路 柳暗花明又一村
簫鼓追隨春社近 衣冠簡朴古風存
從今若許閑乘月 拄杖無時夜叩門

解説 山西の村に遊んで、素朴な村人や田園の趣きを詠じたもの。

語釈 ※山西村 作者の郷里・山陰県の郊外の村。 ※臘酒 十二月に仕込んだ酒を春になって飲む。 ※渾 濁り酒。 ※留客 客をもてなす。 ※山重 水複 山が幾重にも重なり川が曲りくねって複雑なこと。 ※柳暗花明 柳がほの暗く繁つている中に桃の花が灯をともしたように明るく咲いている風情。
※簫鼓 笛と太鼓。 ※追隨 笛と太鼓が後を追いかけるように聞こえてくる。
※春社 立春後に行なう祭で、土地の神を祭つてその年の豊作を祈願する。
※衣冠 村人の正装。 祭りの練習している人達の衣装。 ※簡朴 質素。
※閑 のんびりと。 ※無時 いつといつという時を定めず。 不意に。

通釈 農家が十二月に仕込んだ酒が濁り酒だ、などと笑いなさるな。 去年は豊作だから来客を留めてもてなすのに、鷄も豚も十分ある。 村への途中、山が幾重にも重なり川が曲りくねって複雑で路が尽きるのではないかと疑うと柳が茂って暗いが、花の明るく咲き誇っている一村が見える。 折りから笛や太鼓の音が私の後を追っかけるように聞こえてきて、村祭りの近いことが感じられる。 村人の服装は素朴である。 これから月光の明るい夜に、のんびりとやって来ることが許されるならば、いつと時を定めず、杖について夜中に門をたたいて訪れたいものである。